

## 第2会場 読み書きに困難を感じる学習者の支援ー英語授業のユニバーサルデザイン化ー

司会者： 森 雅也（津市教育委員会事務局教育研究支援課） コーディネーター兼提案者  
提案者： 三木さゆり（大阪市立長吉中学校）  
湯澤美紀（ノートルダム清心女子大学）

## 【総論】

現在、小中学校の普通学級には、約6.5%の発達障がいをもつ子どもが在籍していると言われている。学校生活ではたくさんの困り感を示し、認知特性も障がいによってさまざまである。本討論会では、特に、読み書きに困難をもつ子どもたちに焦点を当て、何を配慮しどのように支援していけばよいのか、日常の授業から具体的に提案する。

## ① 自尊心をもって主体的に英語の授業に参加できる生徒の育成

ー 音韻認識への気づきを高める取り組みを通して ー

森 雅也（津市教育委員会）

読み書きに特別に困難さを示す英語ディスレクシア（読字書字障がい）が疑われる生徒への支援の在り方について研究を進めた。その中で、M. Combley の多感覚学習法にある91種類の音素カードを習得させることで、音韻認識を高め、中学校で学習する英単語のほとんどを読めるようになることがわかった。また、英語四線ノートに代わる七線ノートを導入するとともに、ポメラ（電子メモ帳）でタイピングを徹底的に練習することによりハンドライティングでの英語筆記への苦手意識を軽減した。英語の音声とつづりの関係がわからず、英語を読むことや書くことを苦手になっている生徒への指導の参考になると思われる。

また、A. Bandula(1994)の唱える自己効力感を高める4つの方法（成功体験、言語的説得、ソーシャルモデル、心理的圧迫の除去）を実践し、学習障がい（Learning Disability：LD）をもつことにより、低下している自尊感情を高め、英語授業へ意欲的に参加できる生徒の育成をめざした。

## ② 特別支援教育の視点を取り入れた英語指導

～スローラーナーに寄り添うために一斉授業の中でできること～

三木 さゆり（大阪市立長吉中学校）

今、中学校の現場には、教室の中が騒がしく集中できない状態や蔓延するやる気のないムード、ますます開いていく学力格差など数々の問題が山積している。そこで、「特別支援教育」の考え方を授業の中に取り入れていくことが、これらの問題への解決の糸口になるということを提案したい。

一斉授業の中で、ついていけない生徒たちがいる。話を聞いていない、プリントをしない、単語が読めない、ノートを写すのが遅い、これらすべてには必ず原因がある。「読めないから」「書けないから」といつても何度も練習させるだけでなく、そのつまずきの原因に対して具体的に支援をしていこうというのが特別支援教育の考え方である。

知的に遅れはなくても、「認知力」がうまく使えなければ、情報を取り込んだり、理解したり、覚えたりすることにとっても時間がかかり、そのことが「学びにくさ」につながっていく。そして、このような生徒は通常学級の中にたくさん存在している。そこで本発表では、なぜ英語でつまずくのか、英語の何が難しいのかについてその認知的背景を明らかにしながら考えていきたい。そしてそれらを踏まえた上で、日常の授業の中でどのような配慮や支援が必要なのかについて、実践の中から具体的に提案したい。

### ③ 日本語母語話者の英語知覚の特徴を踏まえた英語入門期の教育のあり方 —LDならびに隠れディスレキシアを抱える子どもたちの支援を視野に入れて—

ノートルダム清心女子大学 湯澤 美紀

LDならびに隠れディスレキシアを抱える子どもたちにとって、英語の学習はいかに困難に満ちたものであるのか。その困難さに向き合いながら、子どもたちの学び方の多様さを踏まえた学習支援のあり方について考えていきたい。

本発表では、まず、日本語母語話者の英語の知覚の特徴を明らかにする。私たちは、出生以前から母語のリズムに親しみ、出生後の応答的な関わりの中で、私たちの耳を母語にチューニングしていく。日本語にチューニングされた耳に、英語はどのように聞こえるのか。実は、ここに日本語母語話者の英語学習の困難さが隠されている。そして、この困難さは、本来、LDならびに隠れディスレキシアを抱える子どもたちにとって、よりシビアなものとなっていることを、ワーキングメモリの理論を用い説明する。

次に、ワーキングメモリの理論にもとづいた支援のあり方について考えていく。ワーキングメモリは、一次的に情報を記憶・操作する能力であり、第二言語習得とも大きく関わっている。LDならびに隠れディスレキシアを抱える子どもたちのワーキングメモリの特徴を踏まえた上で、英語のユニバーサルデザインとして、多感覚を利用したフォニックスの有効性について考えていく。

彼らは、けっして、「怠けている」わけでも、「英語嫌い」でもなく、懸命に学ぼうとしても適切な学習の方法が分からず、「失敗」し、「傷ついている」のである。教師・支援者のより確かな理解が、今、求められる。

#### 【引用文献】

湯澤正通・湯澤 美紀（2013）日本語母語幼児による英語音声の知覚・発声と学習：日本語母語話者は英語音声の知覚・発声がなぜ難しく、どう学習すべきか 風間書房